

# 今日におけるセツルメント運動と 大学地域協働に関する一考察

高木博史\*

はじめに

- I. 今日におけるセツルメント運動
- II. 今日におけるセツルメント運動の形態
  - 1) 学習支援活動としてのとりくみ
  - 2) 多文化共生としてのとりくみ
  - 3) 居場所づくりとしてのとりくみ
  - 4) 今日における「セツルメント運動」の特徴
- III. 大学地域協働とセツルメント運動
- IV. 新たな地域福祉活動拠点の構築を目指しておわりに

## はじめに

今日、大学生の地域活動を表すものとしてセツルメント運動という言葉は必ずしも表舞台に登場してくる言葉ではないが、地域福祉の源流ともいえるものであり、その意義は、格差社会の拡大やグローバル化といった情勢の中、貧困の連鎖の解消に向けたとりくみや多文化共生のとりくみとして再び重要性を増してきている。

セツルメント運動の歴史的経緯は、社会改良運動あるいは社会運動としての側面を強く持ってきた。一方で、今日においては社会運動そのものに関心を示す大学生は少なくなってきた現実がある。活動に参加する者の中にも自覚的に「社会運動」や「社会改良」の意識を持っている者は必ずしも多くない。こうした変遷をたどってきたセツルメント運動に積極的な意義を見出していくとするならば、新たな価値を見出すことである。

本稿では、今日における大学生の地域活動としてのセツルメント運動の実態からその現状と課題について考察を行いその特徴を整理し、さらにこのセツルメント運動を大学地域協働の取り組みの一つとして位置づけていくことの可能

性について問題提起を行うことを目的としている。

## I. 今日におけるセツルメント運動

まず、今日におけるセツルメント運動を考えていくうえで、そもそもセツルメント運動とはどのようなものなのかに言及しておく必要があるだろう。

『地域福祉事典』によれば、「1880年代イギリスにおいて開始されたもので、産業資本主義から独占資本主義へ移行する過程で形成・累積された、都市スラム街の下層労働者・家族を対象」<sup>1)</sup>としたもので「貧困住民の住む地に、教養があり問題意識を持つ中産階級の大学教師や学生、教会関係者などが拠点を設けて移り住み(=セツルメント)、その生活と自立に必要な知識とサービスを提供するとともに、居住環境や社会制度の改善を働きかけて、社会改良を推進した」<sup>2)</sup>運動である。

こうした経緯から、今日においても大学生が貧困家庭や不登校児、外国人労働者の子どもなどに対する学習支援活動は、一般的には、「セツルメント運動」としてボランティア活動の一つであるととらえることができるだろう。

その後、活動がわが国にも広がってくるが、戦時体制に突き進むにつれて、「戦時中、セツルメントをはじめ自由な先進的な運動は危険思想とみなされ、弾圧を受け、大政翼賛運動あるいは動員型の一色に統一された。戦後、新しい憲法で『福祉を追求する権利をすべての国民が有し……』とうたわれ、社会活動の自由が保障されるようになった。ボランティア活動発揚の基盤が生まれたのである」<sup>3)</sup>と述べられている。

\* 岐阜経済大学経済学部准教授

つまり、創始当初は、貧困を中心とした格差是正のための社会運動としての一つ的手段として行われていたといえるが、今日においては、必ずしもそうした目的ばかりではない。もちろん、従来の社会運動的側面が否定されているわけではないが、不登校児の支援や多文化共生の足がかりとして、あるいは、活動参加者自身の自己実現の一つとして行われているものも多い。また、現代においては、交通網の発達により「移り住む」必要性が縮小してきたり、「貧困」という言葉をどのようにとらえるか、あるいは、「貧困」以外の課題を抱えているなど新たな展開を見せてきているといえるだろう。また、活動に参加する担い手の意識としても創始当初のものとは変化してきており、とくに「社会改良」に対する意識は大きく変化してきているといえるだろう。

次章では、そうした実態について事例を踏まえて考察していきたい。

## Ⅱ. わが国における今日のセツルメント運動の形態

ここでは、今日におけるわが国のセツルメント運動の形態について事例を通して考察を進めていくことにする。

### 1) 学習支援活動としてのとりくみ

筆者は、沖縄県において「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」にアドバイザー的立場に関わってきた。ここでは、この取り組みを通し、学習支援活動を中心とした取り組みについて考察していきたい。

当プロジェクトは、NPOや学校関係者、地域住民の協力のもとに2011年度から2012年度にかけてトヨタ財団の助成を受けて実施されたプロジェクトであり主にX地区を対象に行われた。貧困の解消に向けた取り組みとして、「言葉や発達に遅れのある児童、不登校児童、学校や職場に所属せずといわゆるニートと呼ばれる未成年者、外国籍で日本語でのコミュニケーションが十分に取れない親、就労意欲はあるが基礎的な

学力に自信がなく履歴書の記入等が困難な親、子育てに不安を抱える親などを対象」<sup>4)</sup>としたものである。その中心的な取り組みの柱として「放課後学習」を位置付けている。

この放課後学習(2012年度)には、109名の登録者があり、毎週3回、70日の実施で、小学生を対象として行われた。

この活動の担い手は、主に大学生である。20名の登録者があり、平均で7名-9名の大学生が、子どもたちと積極的にコミュニケーションを図りながら勉強を教えるというスタイルである。スタッフには事前に活動の目的や意義についての研修が行われる。

近年、「子どもの貧困」がクローズアップされてきており、「貧困の連鎖」についても盛んに語られてくるようになった。筆者は、この貧困の連鎖が自己責任論と表裏一体の関係であり「今日、跋扈する『自己責任』論のポイントは『競争』に負けるのは自分の努力不足であると。誰でも努力すれば、例えば『偏差値の高い大学』に入学でき、卒業後は大企業に就職でき、収入の高い仕事に就けるかもしれないが、それがうまくいってもいかなくても、現在の社会状況は『自己責任』だけになすりつけ」<sup>5)</sup>られている状況を憂いている。そして、『『所得の高い家庭の子ども』は、塾や家庭教師といった学校以外の『習いごと』によって学力を高めていくことができるため『偏差値の高い大学』に入れる可能性が高く、その結果、『所得の高い家庭』となる可能性は高いという言説は一般化している」<sup>6)</sup>が、こうした状況を克服するための活動としての取り組みの意義が大きくなってきているだろう。

このような学習支援活動の取り組みは、今日では、多くの地域で取り組まれてきており、現代におけるセツルメント運動の一つの形態といえるだろう。また、「貧困の連鎖」を解消するという目的が一つの大きな目標となっており、セツルメント運動の起源にも比較的近い問題意識のもとで活動されているのではないだろうか。

一方で、「貧困」の解消を目的とする活動には潜在化する現代的な課題も見えてきている。それは、そうした取り組みが行われている地域に

対する差別や偏見が助長されるのではないかという懸念や当事者に「貧困」という意識がない、あるいはそのような状態であることを他者に知られたくないという状況がある。つまり、「このプロジェクトを遂行している地域に『貧困地区』であるといった一種の『ラベリング』を行っているのではないかという批判」<sup>7)</sup>が生じることも予想された。当プロジェクトではこうした懸念を克服するために「誰でも気軽に参加できる企画」<sup>8)</sup>をめざす配慮・検討を行った。その結果、100名を超える登録者となったことは一定の成果を上げることができたと考えられることができる。

貧困問題に対応するという意味でオーソドックスな形のセツルメント運動として当プロジェクトの取り組みをとらえるならば、この差別や偏見といった問題は避けて通れないであろう。

しかしながら、現在は、そのような問題意識や対象者との関係性だけでは、もはや取り組みそのものを語り尽くすことはできない。時には、「子どもに教えられる」経験とも体験することがあるだろう。セツルメント運動の創始当初は、大学生はある意味では「特権階級」であり、参加者自身がその立場を「自覚」していたであろうと考えられるが、大学進学率が飛躍的に向上し、大学の大衆化が進んだことが対象者との関係性に影響を与える要因の一つといえる。

このように今日におけるセツルメント運動は、問題意識や対象者との関係性といった側面において、一定の変化を遂げてきたといえるであろう。

## 2) 多文化共生としてのとりくみ

次に、「多文化共生」の取り組みというべき事例について考察する。基本的には学習支援活動としてのとりくみであるが、前述した事例が主に「日本人の子ども」を対象としていたものに対して、主な対象が「外国人の子ども」となっている事例である。必ずしも「貧困」や「貧困の連鎖の解消」を念頭においたものはなく、コミュニケーション能力の向上なども含めた取り組みとなっている点が特徴的である。

ここで取り上げる事例は、市民活動団体である大垣外国人コミュニティーサポートセンターCAPCOが担い、筆者の勤務校である岐阜経済大学地域経済研究所の附置機関として開設され、学生主体で運営を行う「まちなか共同研究室マイスター倶楽部」の学生がスタッフの一部としてかかわっている「ソンニョ・ド・フトロ」の取り組みである。

「ソンニョ・ド・フトロ」とは、ポルトガル語で「将来の夢」という意味である。筆者の勤務校(以下、本学)の立地する岐阜県大垣市は、工業を営む大企業も少なくなく、1990年に行われた「出入国管理及び難民認定法(入管法)」の、日系人やその家族に定住権を認める改正を行った。それに伴い、ポルトガル語を公用語とする日系ブラジル人の移民が増加してきたという経緯がある<sup>9)</sup>。マイスター倶楽部の報告書によれば、こうした1980年代以降に渡日した「ニューカマー」と呼ばれる外国人の子どもは「異なる文化や生活習慣に身を置き、引越しを繰り返す傾向が強い。その度に教育や人間関係が変化していく中で、不安やストレスを抱えることが多く」<sup>10)</sup>、さらに「親たちは仕事に忙しく、子どもとのコミュニケーションの時間がとりにくい上、日本語を覚える機会が少なく、子どもの教育に関して必要な情報が不足しがちになったり、理解できない傾向にある」<sup>11)</sup>と指摘している。

こうした状況から、外国人の子どもは学校での生活に適応することに時間がかかったり、あるいは困難を抱えることも少なくないが、学生を「お兄さん」や「お姉さん」といった位置づけで、自分に近い位置にいる存在とし意識し、時にはさまざまな相談も含めたコミュニケーションを行う場として、まさに「多文化共生の場」の提供としての取り組みであるといえるだろう。また、担い手とする参加する学生たちも、その様子から子どもたちとの「勉強を教える」というよりも、そのことを一つの手段として子どもたちとの交流を楽しみたいという意識であることがうかがえる。そのような意味では、この場が単に、「勉強を教える」「教わる」という機能だけでなく、それらを包含しつつも、もっと「別

の機能」が求められていることが示唆されている。そして、そのことがまさに「多文化共生」や「居場所づくり」といったものである。セツルメント運動と「居場所づくり」の関係性については次節で言及することとする。

また、この活動の特徴一つとして大垣市の委託事業として行われているということもあげることができるだろう。こうした取り組みは、最初は問題意識を持った人々や組織によって活動が開始され、広がりの中で行政との連携や支援を引き出すことになっていくが、行政の支援を引き出すことは容易ではない。その取り組みの実績や効果が蓄積されていることが重要な判断基準になる。そのような意味では、この取り組みの意義が行政を動かしたといっても過言ではないだろう。一方で、行政の支援を受け続けていくためには課題も大きい。筆者は、生活困窮者支援の領域の研究を行っているが、学習支援活動は行政の支援を受けているところも少なくない。特に学習支援活動の場合、参加者数や進学にどれだけ貢献したかという数字やデータといったものに目がいきがちになることである。このことは、「多文化共生」や、後ほど詳しく言及するが、「居場所づくり」という価値観とは時には相反することにもなりうる。参加者個人のペースでゆっくりじっくり向き合おうとすればするほど数字やデータとして表れるものは必ずしも良い方向へ進むとは限らないからである。この活動はそうした葛藤やジレンマを含みながら継続されてきたものであることにも言及しておきたい。

### 3) 「居場所づくり」としての「セツルメント運動」

二つの事例を通して見えてきたことは、大学生が中心となり学習支援活動という手段を通して活動を通して、子どもとのコミュニケーションを図る取り組みであるところは共通している。一方では「貧困」に対する構造的視点の希薄化も否定できない状況であるが、そうした活動が従来のセツルメント運動の視点に加えて、新たな価値を創造しているといえるのではないだ

ろうか。それは、セツルメント運動の従来の目的である「貧困の連鎖の予防や解決」に向けての取り組み、様々な国籍の子どもたちを含めた「多文化共生」としてのとりくみから広がった「居場所づくり」の概念である。

中島喜代子らは、「居場所」の定義を『居場所』は他者から認められたり、他者から自由になって自分を取り戻したりして得られるような『自分を確かめる場所』と定義<sup>12)</sup>している。従来、「居場所」の概念は、1980年代に入り、少年犯罪や少年非行、いじめなどの問題が深刻化し、自殺や不登校の問題などが社会問題化し始めた頃に登場してきた概念である。

一方で、セツルメント運動は、すでに述べたように一定の教養を有する中産階級以上の大学関係者を中心とした取り組みであったことを考えると、明らかに「教える」「教えられる」の関係性の中で取り組まれてきたものであるといえる。そこには明らかに「階級」あるいは「階層」の優位性が存在し、その関係性は現実問題として「上下関係」である側面は否定できない。そのような意味では、セツルメント運動における対象者と活動の担い手の関係性の中では、「居場所」を創出していくこと自体は大きな目的とはされていないといえるだろう。

しかしながら、今日の活動には、必ずしも、自覚的に「社会改良」や「社会運動」に積極的にかかわり、「勉強を教える」という行為こそがそのことにつながっているのだという意識が活動の中に顕在化、あるいは潜在化しているとはいえない。例えば、最初に取り上げた貧困の連鎖を解消することを目的とした事例においても、プロジェクト終了後の報告書において、子どもたちと大学生ボランティアの関係性を示唆するものとして「勉強を教えてもらうというよりもボランティアと話したい子が多い。お気に入りのボランティアさんがいるときに合わせてくる子もいた」「子ども達の言葉づかいが荒かった」といった声や、大学生ボランティアの側からも「子どもたちと勉強以外の面で関わりをもてたら良いと思う」といった声も上がっていた<sup>13)</sup>。ことからそのことが示唆されているといえる

だろう。

#### 4) 今日における「セツルメント運動」の特徴

こうした活動実態を踏まえ、今日における「セツルメント運動」を再考してみると活動参加者における社会改良や社会運動的側面の意識は希薄化してきているといえる。

一方で、こうした「居場所づくり」の側面が活動に目的の一つになってきていることが一つの特徴であるといえるのではないだろうか。そしてこの「居場所」というのは、従来「対象者」として参加していたもののみならず、活動の主な担い手である大学生にとっても「居場所」として機能しているということである。

もちろん、今日、全国で取り組まれている同様の取り組みは、もはや「セツルメント運動」ではないという議論も想定できるが、時代とともにそのあり方や目的が変化しており、積極的な意義を見出すこともできるといえる。そのような意味で、本稿では、貧困問題に対応するといった活動のみならず、多文化共生にとりくみといった同様の活動についても「セツルメント運動」の範疇に加え考察を行ってきた。

### Ⅲ. セツルメント運動と大学地域協働

ここまで、今日におけるセツルメント運動の活動について二つの事例を通して考察を進めてきたが、セツルメント運動の創始当初の思想や方法を必ずしも受け継いでいるわけではないが、時代とともに形を変えながらも、それらの活動そのものは広く浸透してきたといえるだろう。そのような意味では、積極的な意義を持っているが、こうした活動は、事業性や収益性が低いので、やはり何らかの支援がなければ継続することに困難を伴う。一方で、そこに参加する学生が地域の子どもたちとの交流を通し、人間的にも成長していくことを考えれば、地域における人材の育成や大学などの社会貢献活動としては多いに有効であるだろう。そこで、ここではセツルメント運動と大学地域協働活動について考察を進めていく。

中村みどりは、日本の大学セツルメントについて「歴史的事実の一部として記録される日本の大学セツルメントは、その活動の源流である19世紀におけるイギリスの大学のセツルメントの精神を受け継ぎ、『大学拡張』と『社会調査』を柱としてなされた大学人(教員と学生)による活動として、戦前から戦後にわたって展開された。そこでは、大学での研究と教育活動は、科学的に社会問題の解決に対峙することにあり、大学人が果たすべき社会貢献への精神が明確に貫かれていた<sup>14)</sup>」ことを指摘している。大学の地域協働は、「その大学がなぜその地域にあるのか?」という問いに対する答えでなければならない。地域で必要とされない大学は、言うまでもなく学生にも必要とされないのである。そのような意味では、地域協働というのは単なる「理念」のようなものだけでなく具体的な手段と方法で示されなければならない。大学は「知の集積」と称されることもしばしばであるが、蓄積された「知」を、あるいは「学生」や「教員」といった人材をどのようにどのように地域に還元していくのが常に問われているといってもよい。また、ここでは、「大学人」とされているが、やはり組織的な対応がなされるということが強力な支援体制の構築につながるということを考えれば、大学の社会貢献活動の一つとして位置付けることには違和感はないであろう。また、中村は「学生の精神的成長や慈善意識の高まりは、社会貢献活動を行うことに限らず、あらゆる場における様々な体験が影響し合って育成されるものであると考えられる。そうした人間形成の過程の中で学問を体系的に学ぶことに触れたときに、自立した連帯的意識とそれを実現に移すための行動が学生の中に生まれてくる<sup>15)</sup>」と指摘し、こうした学びを支える体制を整備していくことに取り組んでいくことが「大学教育の社会的意義としていっそう求められていく<sup>16)</sup>」と述べている。セツルメント運動は社会貢献活動の一つである。中村が指摘するように多様な体験が学生の成長を促すとするならば、学習支援活動を通した子どもたちの交流は、地

域貢献や社会貢献という枠内にとどまらずに教育の一環として位置付けられるべきであり、そうした機会を提供してくれる活動の支援や場の提供は大学の存在目的にも合致するといえるだろう。

これまで、セツルメント運動は大学の意思とは関係なく学生たち、あるいは関心を持つ一部の教員の自主的な活動として発展してきた。しかし、大学の存在意義の原点を問い直す時、大学そのものがセツルメント運動の拠点であってもよいと考えることもできる。一方で、貧困問題だけが解決すべき問題ではないということも事実であり、それに対応するために様々な学問体系が発展してきた。多様化する学部や学生の中で、大学本来の力を集約する場が必要である。筆者はそれが、大学の強力な支援があるセツルメント運動拠点ではないかという選択肢を提示しておきたい。

また、筆者は、今日のセツルメント運動の特徴として「居場所」について述べてきたが、多様化する学生像の中で自己肯定感が低い学生も少なくない数で存在する。こうした活動に関心を向け参加を促していくことで、自らの「居場所」を見つけることができるのであれば、それを支援していくというのも大学の責務ではないだろうか。学生が元気になることで地域が元気になるといった循環を作っていくことが求められている。

#### IV. 新たな地域福祉活動拠点の構築を 目指して

大学の地域協働を考える上で、近年の地方私大をめぐる状況の問題を避けて通ることはできない。18歳人口の減少とともに地方の私立大学は非常に経営が難しくなっている。学内だけの教育活動に終始しては、大学としての存在意義も危うくなることから地域貢献活動を掲げている大学も少なくない。しかし、地域貢献活動といったときに、単に公開講座などを開催し、地域住民に受講の道を開くといっただけでは十分でない。具体的な地域との協働の取

り組みが必要になってきているのである。

ここまで見てきたように、今日におけるセツルメント運動は、形を変えながらも新しい段階を迎えてきたといえる。ここに、大学の地域協働の取り組みとして強力な支援体制が整備されるならば、大学の地域協働のあり方を模索していく上で一つの有効な手段ではないだろうか。そのためにはまず、拠点の準備である。学生たちが取り組みについて準備し、話し合い、振り返ることのできる場所＝空間の提供である。これは、何もセツルメント運動に限らず多くの取り組みにも共通していえることである。幸いにも筆者が勤務する岐阜経済大学地域経済研究所には、大学外に、しかも大垣市の中心部に「まちなか共同研究室マイスター倶楽部」という拠点を所有している。これは、大学の地域協働としてすでに一定の資源として位置付けることができ、こうした発展させる取り組みとして活用することで新たな地域福祉活動拠点の展開が図られていくのではないだろうか。また、教員も単に個人的な研究の対象のみとして関わるのではなく、大学の地域貢献活動であることを自覚し、学生の取り組みや活動に積極的に参加、助言などを行っていくことでさらによい循環が生まれてくるであろう。そのことが大学地域協働を実体のあるものとしていく新たな地域福祉拠点の構築につながっていくのではないだろうか。

#### おわりに

本稿では、今日におけるセツルメント運動が学地域協働に関して考察を進めてきたが、「セツルメント運動」のその目的やあり方を微妙に変化させながら今日に至っていることを明らかにし、時代に求められる形とそれに対応する大学地域協働のあり方について若干の問題提起をすることができた。

一方で、事例を通じた考察を行うことで実態については、一定の考察はできたが、理論的・歴史的背景からの分析や検証については十分ではなかった。大学地域協働のあり方についても具体的な方向性としてセツルメント運動に対す

る支援は一つの有効な手段であることの提示は行うことはできたが、他の活動との連関やその効果の検証までは行えなかったことは今後の残された研究課題である。

### 【注】

- 1) 日本地域福祉学会編集『地域福祉事典』中央法規、376頁、1997年
  - 2) 同
  - 3) 同、326頁
  - 4) 「貧困の連鎖を解消する現代の『寺子屋』プロジェクト」『トヨタ財団 2010年度地域社会プログラム応募用紙』
  - 5) 高木博史「八 無縁社会と現代の貧困」山口道宏編著『無縁介護 単身高齢社会の老い・孤立・貧困』現代書館、2011年、51頁
  - 6) 同
  - 7) 高木博史「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクトの中間報告」『長野大学紀要 第34巻第1号』2012年、66頁
  - 8) 同、66頁
  - 9) 岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部活動報告書、2014年、95頁
  - 10) 同、98頁
  - 11) 同
  - 12) 中島喜代子・廣出円・小長井明美「『居場所』概念の検討」『三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学』2007年、88頁
  - 13) 高木博史「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクトの成果と課題（最終報告）」『長野大学紀要 第35巻第2号』2013年、53頁
  - 14) 中村みどり「大学における社会貢献活動の意義について—大学セツルメントの歴史から見いだすもの—」『上智大学教育学論集 (48)』、2014年、43頁
  - 15) 同、53頁
  - 16) 同
- ・高木博史「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクトの成果と課題（最終報告）」『長野大学紀要 第35巻第2号』2013年
  - ・『岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部活動報告書』2014年
  - ・柴田善守『社会福祉の歴史とボランティア活動—イギリスを中心として—』大阪ボランティア協会、1980年
  - ・中島喜代子・廣出円・小長井明美「『居場所』概念の検討」『三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学』2007年
  - ・中村みどり「大学における社会貢献活動の意義について—大学セツルメントの歴史から見いだすもの—」『上智大学教育学論集 (48)』、2014年
  - ・岐阜経済大学まちなか共同研究室マイスター倶楽部「Sonho do futuro プロジェクト パンフレット」

### 【参考文献】

- ・日本地域福祉学会編集『地域福祉事典』中央法規、1997年
- ・高木博史「八 無縁社会と現代の貧困」山口道宏編著『無縁介護 単身高齢社会の老い・孤立・貧困』現代書館、2011年
- ・高木博史「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」の中間報告」『長野大学紀要 第34巻第1号』